慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後期における岩下俊作「富島松五郎伝」の改編をめぐって
Sub Title	The post-war adaptations of Iwashita Shunsaku's The life of Tomishima Matsugoro
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.209 (172)- 226 (155)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0209

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦後期における岩下俊作「富島松五郎伝」の改編をめぐって

杉野　元子

はじめに

前稿「戦時期における岩下俊作「富島松五郎伝」の改編をめぐって」[1]では、岩下俊作が日中全面戦争勃発2年目の1939年10月に発表した小説「富島松五郎伝」が、その後アジア・太平洋戦争へと戦争が拡大、日本が敗戦に落とし込まれるに至る戦争下の時代に、小説、映画、演劇という3つの分野において、時代を投影しつつどのように改編がなされてきたか、その足跡をたどった。これまでの研究では、岩下俊作自身による改作小説「富島松五郎伝」（1940年6月）、文学座「富島松五郎伝」（1942年5月）、映画「無法松の一生」（1943年10月）、苦楽座「無法松の一生」（1944年1月～2月、11月～12月）については言及がなされてきたが、前稿では新たに、新生劇（1943年11月）、川浪良太郎一座（1943年11月）、新生新派（1944年2月）、江味三郎劇団（1944年1月～）、女沢正劇団（1944年5月～）がそれぞれ「無法松の一生」を上演し、厚生劇・関西大歌舞伎・東京新派大合同（1943年12月）が「無法松」を上演したことを明らかにした。また台本やパンフレットなどが残っている改編作品については、その内容に踏み込んで検討を加えた。本稿では前稿に引き続き、時代を戦時期から環境の一変した戦後期へ移し、小説「富島松五郎伝」の改編状況を追跡してゆく。

一、戦後期の改編――演劇

小説「富島松五郎伝」舞台化の動きは戦後になっても止むところを知ら

ず、こんにちまで大小さまざまな劇団が「無法松」物を舞台で演じてきた。演劇の分野における「無法松」物は、都市の下町にある常打ち小屋や地方の健康ランド、旅館、ホテルのステージなどで演じられる大衆演劇も含めると、おびただしい数に及ぶであろう。本節では、小説「富島松五郎伝」の一番の山場とも言える、松五郎が吉岡大尉未亡人・良子に対して長年胸の内に秘めてきた思慕の情を打ち明けようとする告白場面に焦点を当て、台本を閲覧することのできた作品の中から、告白場面における良子の言動に顕著な違いが見られる文学座、新国劇、田村高廣奮闘公演、劇団青年座の舞台を選び、比較しながら考察をすすめる。

（1）文学座

前稿でも述べたように、文学座は小説「富島松五郎伝」の舞台化を最初に手がけた劇団で、1942年5月6日から21日まで国民新劇場で「富島松五郎伝」（脚色：森本薫、演出：里見弴、主演：丸山定夫）を上演した。戦後も引き続き上演がおこなわれ、1953年9月26日から10月25日まで大阪毎日会館などで「富島松五郎伝」（脚色：森本薫、演出：戌井市郎、主演：三津田健）、1969年12月6日から25日まで国立劇場小劇場で「富島松五郎伝 ── 無法松の一生 ──」（脚色：森本薫、補訂：戌井市郎、演出：戌井市郎、主演：加藤武）、さらに1970年1月18日から7月18日まで全国各地で「富島松五郎伝」（脚色：森本薫、補訂：戌井市郎、演出：戌井市郎、主演：加藤武）が上演された[2]。

文学座は一貫して森本薫の台本に拠っている。1953年出版の森本薫脚色台本をもとに、告白場面を見てみよう。良子は松五郎の自分に対する恋慕の情に気づかないまま大正8年の節分の夜を迎える。松五郎は吉岡家を訪れ、良子と昔の思い出を語り合っているうちに、以前良子が実家に戻るのを止めたのは、「奥さんが此処からをらんやうになんなさるが辛抱出来ませんぢやつたばい」と胸の内を明かす。しかし良子は松五郎の真意を汲み取れず、「でも、そのおかげで私達は、今かうして親子水入らずで……」と言ったため、松五郎はついに積年の想いを吐露する。

松五郎　奥さん！違ふ、そげなこつちやなか、奥さん！俺や！俺や！

（と、良子の手をとる）

良　子　まあ、松あん、お前！

と、身を引かうとする、がすでにおそく、その片手は松五郎に握られてゐる。

間。

近所の家で鬼は外、の声、あとににぎやかな笑声。

松五郎　奥さん、すまん。

さう云つてゆつくり立ち上りそのまま出てゆく。

良　子　松あん、松あん！

と、呼ぶが松五郎は見返りもせず呼んだ良子もまた、何の目的で呼んだかわからない。松五郎の握つた手を胸の辺に握りあてる。[3]

森本薫版では、松五郎と敏雄は最後まで親密な関係を保つが、岩下俊作の原作では、敏雄は成長するにつれて、野生そのままの松五郎の無智な愛を厭わしく思うようになり、松五郎から離れていく。原作では失意の底にある松五郎が「霙の降る肌寒い三月の宵、突然、酒気を帯びた」状態で吉岡家を訪れるところから、告白場面が始まる。

「奥さん、俺は淋しゆうてつらい。奥さん俺は……」と云ひかけて、突然、松五郎の逞しい掌が夫人の華奢な手をがつしり把んだ。夫人は僅かに戦慄したのみで、激しい男の情熱に圧倒されて、化石の様に凝固した。

このあと松五郎はすぐに「奥さん済まん」と叫んでその場を去り、夫人は「大きな空虚感と恐怖に襲はれて、サメザメと泣き伏した」[4]。

このように森本薫版と原作の告白場面は、細部において違いがあるものの、松五郎に突然手を握られた良子が、その激しい情熱に圧倒されて茫然自失となるという点においては共通する。

（２）新国劇

新国劇は終戦後間もない1945年11月3日から27日まで東京・有楽座で、12月1日から28日まで大阪・北野劇場で、「無法松」（脚色：森本薫、演

出：関口次郎、主演：辰巳柳太郎）を上演した。このときは文学座と同様に、森本薫の台本を用いたが、その後辰巳柳太郎は中江良夫に新しく脚色することを依頼し、1955年9月2日から26日まで明治座で「無法一代」（脚色・演出：中江良夫）を上演する。「無法一代」は1977年まで上演を重ね、辰巳柳太郎は当たり役として松五郎を72歳まで演じ続けた[5]。1955年9月明治座での上演台本をもとに、告白場面を見てみよう。

祇園祭りの日、松五郎は良子が間借りしている釣具店の二階を久しぶりに訪れる。松五郎は良子と酒を酌み交しているうちに、ふつふつと湧いてくる情念を抑えることができなくなる。

松五郎　（急に）奥さん……奥さん、俺淋しんぢや。

松五郎、良子を心こめて、みつめる……

良子、身を引こうとする。が、既におそくその片手は松五郎に堅く握られている。

このとき敏雄の声が聞こえたため、松五郎は手を放す。帰省で自宅に戻ってきた敏雄は、松五郎に対して「今後、此の家に出入りして貰いたくないんだ」と言い、良子に対して「僕たちと松っあんとは元々住む世界が違うんだ」と言ったため、良子はたしなめる。

良　子　あれぢや松っあんが可哀想です。

敏　雄　お母さんは松っあんが好きなんですか。

良　子　（思い切つた様に）好きです！人間として好きです。[6]

原作および文学座の森本薫版では、良子は松五郎から突然手を握られ、驚き、戸惑うばかりだったが、新国劇の中江良夫版では、良子は松五郎もいる場所で、息子に対して、松五郎が好きだと言い放つ。しかしすぐその後で「人間として」という但し書きをつけることにより、性的存在として意識されていないという冷酷な事実を松五郎に突きつけるのである[7]。

（3）田村高廣奮闘公演

1977年2月1日から26日まで、梅田コマ劇場の田村高廣奮闘公演で「無法松の一生」が上演され、田村高廣は、父親・阪東妻三郎の当たり役・松五郎を演じた。脚色と演出は榎本滋民である。告白場面を見てみよう。

祇園祭りの日、松五郎は帰省した敏雄から、「もううちへはこないでもらいたいんだ」、「はっきりいえば迷惑なんだ」と言われたことを、良子に告げる。

良　子　そう……。あの子がそんなことを……。

二人、身を堅くする。小倉連隊の消灯ラッパの音が長々と尾をひく。

松五郎　（うめくように）奥さん……。

良　子　（落涙を見て）松つあん……。

松五郎　おれはどげえしたらいいか……。さびしゅうて……つらい……。奥さん！（手をとる）

良子、はっと身をひきかけるが、目をとじて抱かれる。二人、畳の上に倒れるが、そのはずみに座卓のふちにおいてあった吉岡の遺影が落ちる。松五郎、われにかえり、倉皇と玄関から下手へ去る。

良子、しばらく身じろぎもしないでいるが、せきを切ったように号泣する。[8]

原作、森本薫版、中江良夫版の良子は、松五郎に手を握られるだけだったが、榎本滋民版の良子は、松五郎の情にほだされて抱擁を受け入れる。また榎本滋民版には、吉岡大尉の病死後、実家の造り酒屋の番頭・勘吉がやってきて実家に戻るようにしつこく迫ったため、良子が男勝りの威勢の良い啖呵を切る場面がある。

良　子　（たたきつけるように）しゃあらしかね、こん人あ！さっきからいわしちょきゃあ、なんばこきよるとけ！

勘　吉　（ちぢみ上がって）お嬢さん……。

良　子　あたきゃもう峰の嵐〔酒の銘柄――引用者注〕の娘じゃなか。吉岡良子ちゅう一人の女子ばい。耳い竹の子のはえることな、もう聞かん。[9]

原作の良子は上品で控え目な型どおりの大和撫子だったが、榎本滋民版は、良子を時と場合によっては、自分の考えを堂々と主張したり、大胆な

行動をとったりする、型破りな女性として描き上げている。

（4）劇団青年座

劇団青年座「無法松の一生」（脚色：西島大、演出：鈴木完一郎、主演：津嘉山正種）は、1998年1月16日から25日まで東京・サンシャイン劇場で上演され、その後2000年1月10日から4月9日、2001年1月11日から6月15日まで全国各地で巡演された。上演回数は青年座始まって以来の記録163回を刻んだ[10]。脚色を担当した西島大は、森本薫の舞台台本と伊丹万作の映画台本を参照しながら[11]、大幅な改編をおこなった。告白場面を見てみよう。

松五郎は、墓参りのときに、良子から敏雄の進路問題に口を挟まないでほしいと言われ、顔面蒼白となる。松五郎はその日の夜、吉岡家を訪ねる。

松五郎　奥さん！俺ァ……俺ァ！

思わず良子の手をとる。

良　子　松ぁん、お前！

身を引こうとするが、その手はしっかりと松五郎に握られている。

然し、良子はそれ以上抗おうとはせず、己れを凝視する松五郎を、己れもまたひたとみつめ返す。[12]

このあと敏雄の歌声が聞こえてきたので、松五郎は「奥さん、すまん」と言って立ち去り、良子は松五郎に握られた手を胸の辺りに当てる。この告白場面は、森本薫版と酷似しているが、森本薫版には良子が「己れを凝視する松五郎を、己れもまたひたとみつめ返す」というト書きがない。西島大版における「ひたとみつめ返す」という動作は、良子の芯の強さの表れであり、このあとにある良子が毅然たる態度で勇気ある決断をする場面にもつながってゆく。

良子は東京在住の亡夫の後輩軍人から求婚され、敏雄もこの結婚に賛成していたが、祇園祭りの日、良子は東京へは行かず、小倉に骨を埋めることにしたと敏雄に伝え、自分がこれから歩もうとしている「一本の道」がどのような道なのかを敏雄に告げようとする。しかしまさにそのとき、松

五郎が倒れたという知らせがもたらされたため、「一本の道」の具体的な中味は謎のまま残されるのだが、良子が、熟慮を重ねたうえの重い決断であると言っていること、松五郎の病床で「いまこの人に何かあると……私……」と言っていることなどから、「一本の道」が松五郎との身分差を越えた愛を全うさせることであることが暗示されている。

戦中、戦後を通じて、「無法松」物の演劇台本には、原作にはない女性、たとえば松五郎に惚れ込む芸者や良子の家で裁縫を習っている敏雄の女友達などが登場するものが多いが、西島大版にも、松五郎に岡惚れする芸者・駒千代と良子の家でオルガンを習っている明子という二人の女性が登場する。駒千代は従来の台本における松五郎に惚れる女と大差がないが、明子の人物像は極めて異色である。これまでの台本における敏雄の女友達は、個性に乏しい平凡な女性だったが、明子はウイーン生まれの帰国子女で、『青鞜』や『改造』を愛読し、男女同権と自由平等を求め、「人形の家」のノラにあこがれるという、まさに時代の先端をゆく女性である。しかし明子は封建そのものがまだ堂々と残っていて息苦しい小倉の町を出て行きたいと言っていたにもかかわらず、最終的には元小倉藩主の名門一族に嫁ぐという、月並みな選択をする。西島大は、「新しい女」の典型と見なされていたにもかかわらずノラになることができなかった明子と明子の親の世代にもかかわらず世間のしがらみをはねのけノラになることを決意する良子を対照的に描くことにより、良子の決断の重さを浮き彫りにする。そしてこのような良子の姿は、吉岡母子のために身を粉にして尽くした松五郎の姿に引けを取らないほどの鮮明な印象を観客に与える。しかしそのいっぽうで、原作では「義理・人情」を貫き通した男の悲哀と孤独というテーマが存分に深められているのに対して、西島大版では「自由・平等」を選び取る女の気高さと勇気という新しいテーマが加わり、二つのテーマがやや自然さを欠く形でねじり合わせられているため、それぞれのテーマの深化が弱められ、中途半端に終わっているようにも感じられる。

＊＊＊＊＊

本節では、「無法松」物の演劇台本の中から森本薫、中江良夫、榎本滋

民、西島大の台本を取り上げ、告白場面を中心にして、良子像の比較をおこなった。そして戦時中に書かれた森本薫版の良子は、原作と同じく、松五郎に突然手を握られ驚き戸惑うばかりだったが、戦後に書かれた台本では、息子と松五郎の前で松五郎を人間として好きだと言い放つ良子、松五郎に身をゆだねて抱かれる良子、松五郎とともに「一本の道」を歩むことを決意する良子、というように、脚色者がそれぞれ戦後社会の女性を取り巻く環境変化と、それにともなう女性の意識変化を見据えながら、原作とは異なる新しい良子像を生み出していることを明らかにした。

なお戦後に「無法松」物を上演した劇団は、文学座、新国劇、青年座の他にもたくさんあり、青春座[13]、劇団新派[14]、宝塚歌劇団[15]、沢竜二事務所[16]などが手がけている。また本節で取り上げた田村高廣奮闘公演以外にも、数多くの座長公演がおこなわれていて、主なものとしては、村田英雄（1966年7月、1977年9月、1978年3月）、小林旭（1982年7月、2007年7月）、杉良太郎（1983年7月、1984年8月、1987年8月、1991年7月、2001年8月）、北大路欣也（1985年5月）、五木ひろし（1989年1月、1990年9月）、北島三郎（1989年6月、1999年6月、2007年3月・6月・9月・11月）の座長公演がある。

二、戦後期の改編 —— 映画・テレビドラマ・ラジオドラマ

（1）映画

小説「富島松五郎伝」は戦中に1回、戦後に3回映画化された。映画タイトルはすべて「無法松の一生」である。1回目は1943年で監督が稲垣浩、主演が阪東妻三郎、2回目は1958年で監督が稲垣浩、主演が三船敏郎、3回目は1963年で監督が村山新治、主演が三國連太郎、4回目は1965年で監督が三隅研次、主演が勝新太郎である。脚色は1943年版、1958年版、1965年版が伊丹万作、1963年版が伊藤大輔である。伊丹万作は、原作にあまり手を加えずに脚色しているため、告白場面も、のちに有名になる松五郎の「おれの心は汚い」という台詞が加えられている以外は、原作とそれほど大きな違いがない。いっぽう伊藤大輔の脚色は、原作との異同が大きい。祇

園祭りの日、帰省した敏雄と良子の間で次のような会話が交わされる。

敏雄「（ちよツとためらツたが）母さんは松……あの男が好きなんですか」

良子「（澄んだ眼にじツと敏雄を見る）はい、好きです！」

敏雄「あんな！（噛んで吐き出すよう）」

良子「好きとだけでは云い足りません。人間として、偉い人だと思うています（？ヨ）」[17]

新国劇の中江良夫版にも類似した場面があり、良子は「人間として好きです」と言うが、伊藤大輔版の良子は、松五郎を好きなだけでなく、人間として尊敬している、と言う。しかしこのあとにある松五郎の告白場面での良子は、松五郎に手を握られても、呆然とするばかりで、松五郎の想いに応えるような言葉は一言も発しない。1963年版の映画は未見であるが、台本を読むかぎりでは、敏雄の前で「好きです」と断言したにもかかわらず、松五郎が積年の想いを告白したときに無言のままでいる良子の内面については、はかりかねるものを感じる。

4回の映画化の中で、1943年版と1958年版（ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞受賞）は大きな評判を呼び、演劇、映画、テレビドラマなどの分野における「無法松」物改編ブームの原動力となったが、それとともに、何人かの映画監督がこの1943年版あるいは1958年版から触発されたと思われる、「無法松の一生」のモチーフを取り込んだ作品を撮っていることも注目される。

「馬鹿まるだし」（1964年）は藤原審爾原作「庭にひともと白木蓮」を、山田洋次と加藤泰が共同で脚色し、山田洋次が監督した喜劇作品である。「馬鹿まるだし」には、お人好しの風来坊・安五郎（ハナ肇）が旅芝居の一座の「無法松の一生」を見て感動する場面や、安五郎が寺のご新造さんに「無法松の一生」の台詞をまねして「あつしやあ、汚れておりやす」と告白し、「どうしたの…泥でもついているの」と見当外れな答えを返される場面がある[18]。山田洋次自身も「子供のころ感動した『無法松の一生』のパロディー的な要素を加え、エネルギッシュなハナちゃんと、ぶつかりげ

いこをするように作り上げました[19]」と証言している。

「男はつらいよ」は1969年から1995年まで全48作が作られ、山田洋次はすべての原作・脚本を担当し、第3作と第4作を除く46作を監督した。佐藤忠男は、「「男はつらいよ」シリーズは「無法松の一生」のパロディ」であり、「寅次郎が〝男はつらいよ〟と言い、いずれひとかどの〝男〟になると夢みるとき、その〝男〟というのは無法松みたいな男のこと」ではないかと指摘している[20]。「無法松の一生」は1965年を最後に映画化の動きが止まるが、無口な硬骨漢「無法松」は、戦後の空間の中で、饒舌なお調子者「寅さん」へと姿を変え、生き残っていくのである。

「遙かなる山の呼び声」（1980年、監督：山田洋次、脚本：山田洋次・朝間義隆）にも、映画「無法松の一生」が投影されている。未亡人と幼い息子が暮らす北海道の牧場に、無口な謎の男（高倉健）がやってきて献身的に尽くす。男が草競馬に出て優勝したとき、未亡人は男に対して、「この子〔息子――引用者注〕があんな大きな声出したの、初めて見たわ[21]」と言うが、この台詞は、松五郎が徒競走で優勝したときの良子の台詞とほぼ重なっている。

「でっかいでっかい野郎」（1969年、監督：野村芳太郎、脚本：野村芳太郎・永井素夫）は喜劇作品で、お人好しの風来坊・松次郎（渥美清）は想いを寄せる女性・友江から無法松の物語を聞かされすっかり感動する。松次郎は二代目無法松になることを決意して、友江のためにあれこれ尽くすものの、片思いに終わる。

「オリヲン座からの招待状」（2007年、監督：三枝健起、脚本：いながききよたか）は、浅田次郎の同名短篇小説を原作とする作品で、映画技師の留吉（加瀬亮）は映画館経営者の未亡人・トヨと結婚し、未亡人を献身的に支えながら映画館の経営を続けるが、テレビの普及とともに、映画館は閉館に追い込まれる。最終興行作品に選ばれたのは1943年版「無法松の一生」である。「古びた映画館に閉じこもる、か弱い男女。映画館と共に朽ち果てそうなはかなさだ。といっても、性愛のドラマでもなければ、幽霊話でもない。きれいごとばかりのメロドラマは、水で薄めた「無法松の一

生」のよう」という厳しい評価もある[22]。

「すばらしい松おじさん」（1973年、監督：酒井修、脚本：金子武郎・酒井修）は、母子家庭の少年と昔気質の職人・松おじさん（ハナ肇）の交流を描いた作品である。この映画は児童向けで、松おじさんと少年の母親である未亡人の間には色恋が挟まれないが、松おじさんが少年を実の子のようにかわいがり、逞しい男に育てようとする姿は、松五郎を彷彿とさせる。

（2）テレビドラマ・ラジオドラマ

小説「富島松五郎伝」のテレビドラマ化は、映画化と連動して、1960年前後に集中している。1回目は1957年7月23日～8月20日「無法松の一生」（1話30分全4話、脚色：中江良夫・山口素一、主演：田崎潤）、2回目は1959年5月14日～6月11日「無法一代」（1話30分全5話、脚色：不明、主演：辰巳柳太郎）、3回目は1962年3月5日～4月9日「無法松の一生」（1話30分全5話、脚色：池波正太郎、主演：須賀不二男）、4回目は1962年8月1日～8月29日「無法松の一生」（1話30分全５話、脚色：上野一雄、主演：田崎潤）、5回目は1964年4月15日～7月8日「無法松の一生」（1話60分全13話、脚色：宮川一郎・水谷薫、主演：南原宏治）である[23]。

ラジオドラマは1957年11月3日と9日に、「無法松の一生」（制作：博報堂ラジオ部、脚色：森本薫・戌井市郎、演出・戌井市郎、主演：三津田健）が放送された。

三、戦後期の改編 ── 浪曲・歌謡曲

（1）浪曲[24]

前稿執筆時には調べが行き届かず言及できなかったが、「富島松五郎伝」は戦時中に浪曲へも改編されていた。唯二郎『実録浪曲史』によると、末広友若は1944年10月25日夜、第3回国民浪曲賞参加作品として畑喜代司脚色の浪曲「無法松の一生」を口演した[25]。1944年度は「日中戦争開始以来、浪曲が実演にラジオに最も重要視された時期と思われ」、「百三十本におよぶ浪曲放送のうち、約半数が戦意高揚・国粋主義を鼓吹した官製の新作浪曲」であった[26]。戦時中の浪曲「無法松の一生」の口演状況については

詳細が不明だが、情報局の肝いりで愛国浪曲や軍事浪曲が量産される中、それらとは一線を画し、「義理・人情」や「情愛」という庶民に人気のあるテーマを扱う浪曲「無法松の一生」は、映画「無法松の一生」（1943年）と同様に、人気を博したのではないかと思われる。

戦前から戦中にかけて、浪曲は絶大な人気を誇ったが、終戦後はGHQの台本検閲などによって人気が低迷する[27]。しかし1951年、民放ラジオが開局するとともに、連続浪曲番組や素人浪曲のど自慢番組が次々に編成され、浪曲は絶頂期を迎える。このような時期に、村田英雄が浪曲師として頭角を表す。村田英雄（1929年～2002年）は1936年、浪曲師・酒井雲に師事し、酒井雲坊と名乗る[28]。1954年3月、新人の登竜門と目される第6回読売賞新作浪曲競演会で優勝し、同年7月、「村田英雄」改名披露公演をおこなう。1957年から文化放送ラジオ連続浪曲番組を担当するようになるが、翌年この番組を偶然聴いた古賀政男から歌手にならないかと声がかかる。1958年3月、村田英雄のラジオ連続浪曲「無法松の一生」（全30回、脚色：吉野夫二郎）は古賀政男作曲の主題歌とともに放送され、同年7月、レコード（A面は「無法松の一生」、B面は「度胸千両」、ともに作詞は吉野夫二郎、作曲は古賀政男）が発売される。

1950年代後半になってテレビが普及するようになり、テレビ時代が幕開けする。それにともないラジオ浪曲番組の人気に陰りが見えるようになり、浪曲ブームは退潮期を迎える。村田英雄は、浪曲ブームが絶頂期から退潮期へ移行しつつあった1958年に、古賀政男の知遇を得て、主題歌入りの文芸浪曲「無法松の一生」を口演する。そしてこの主題歌がレコードとなって歌手デビューを果たし、浪曲で鍛えられた喉によって、歌謡界のトップへと上り詰めるのである。

（2）歌謡曲

村田英雄のデビュー曲「無法松の一生」（1958年）は、当初売れ行きがよくなかった。しかし「王将」（1961年）の爆発的ヒットにより、「無法松の一生」も息を吹き返し、1981年には、「無法松の一生」の2番の歌詞を削除して、そこに「度胸千両」を挟み込んだ「無法松の一生（度胸千両入

り)」が発売される。現在ではこの「無法松の一生（度胸千両入り)」が広く知られ、多くの歌手にカバーされている。

「無法松の一生（度胸千両入り)」に次いで有名な「無法松」物の歌は、坂本冬美[29]の「あばれ太鼓」(1987年3月、作詞：たかたかし、作曲：猪俣公章）であろう。坂本冬美は、いまや日本を代表する演歌歌手として活躍しているが、歌手人生のスタートを切った曲は「無法松」物だった。坂本冬美はデビュー曲として用意された候補作品8曲の中で「あばれ太鼓」が一番嫌いだった。理由は「いまさら「無法松の一生」だなんて、時代に合わない」と思ったからである[30]。レコード会社内部でも題材が古く、時代遅れでないかという意見がかなりあったが、この曲は1987年9月には50万枚を超す大ヒットとなり、1987年11月には「あばれ太鼓 ～無法一代入り～」(作詞：たかたかし、作曲：猪俣公章）も発売される。これは「無法松の一生（度胸千両入り)」に倣って、「あばれ太鼓」の2番の歌詞を削除して、「無法一代」という浪曲調の歌を挟み込んだものである。坂本冬美は1987年に日本レコード大賞新人賞など17もの音楽関係新人賞に輝いた。

「無法松の一生（度胸千両入り)」と「あばれ太鼓」の人気に刺激されて、1990年代以降、京山幸若「炎華一代」(1994年)、北島三郎「あばれ松」(1999年)、北島三郎「無法一代・恋しぐれ」(1999年)、岡千秋・島津悦子「玄海情話～無法松の一生より～」(2001年)、佐伯一郎「無法松・小倉春秋」(2006年)、長保有紀「玄界情話」(2008年)、坂本冬美「秘恋～松五郎の恋～」(2011年）などの「無法松」物歌謡曲が続々誕生する。また「無法松」物ではあるが原作からの逸脱が目立つ歌として、松五郎に糟糠の妻がいる設定となっている冠二郎「人生夢太鼓」(2010年）や博多美人が松五郎を口説くという設定になっている黒木姉妹「燃えちゃろか」(2011年）などがある。さらに「無法松」に擬せられる人物の生き様を歌ったものとして、村田英雄「二代目無法松」(1988年)、二葉百合子「おんな無法松」(1992年)、中津川ゆり「おんな一代無法松」(1996年)、水沢明美「おんな無法松」(1997年)、清水博正「上州松五郎」(2011年)、にしきこうじ「浪花の松五郎」(2012年）などがある。

おわりに

本稿では戦後期における岩下俊作「富島松五郎伝」の改編作品について考察してきたが、全体を眺め渡したとき、「女性」が一つのキーワードとして浮かび上がってくる。第一節で述べたように、原作の良子は自己抑制が強く自己主張に乏しいが、戦後の新国劇、田村高廣奮闘公演、劇団青年座の舞台における良子は原作と異なり、息子と松五郎の前で松五郎を人間として好きだと言い放ったり、松五郎に身をゆだねて抱かれたり、松五郎とともに「一本の道」を歩むことを決意したりする。また第三節で述べたように、「無法松」物の歌の中では、村田英雄「無法松の一生（度胸千両入り）」（1981年）が圧倒的な知名度を誇るが、19歳の坂本冬美が松五郎になりきって、「どうせ死ぬときゃ　裸じゃないか／あれも夢なら これも夢／愚痴はいうまい　玄界そだち」と迫力たっぷりに歌った「あばれ太鼓」（1987年）も人々に新鮮なインパクトを与え、現在までに80万枚を売る大ヒットとなった[31]。さらに二葉百合子「おんな無法松」（1992年）や水沢明美「おんな無法松」（1997年）のような女性版無法松が登場する曲も作られている。このように戦後、舞台で演じられる良子像に変化が生じるようになり、「無法松」物に取り組む女性歌手も増えてきたが、これらは、戦後における女性の権利拡張や意識改革と密接に関連していると考えられる。

前稿では戦時期、本稿では戦後期の「無法松」物作品について、可能な限り幅広く跡付けして論じてきたが、戦中戦後を通じて、「無法松」物のブームは3回おきている。1回目は戦争末期で、1943年10月に封切られた阪東妻三郎主演映画「無法松の一生」のヒットが契機となり、新劇、新派劇、歌舞伎、大衆演劇の作品が相次いで作られ、浪曲へも改編された。

2回目は1960年代で、1958年4月に封切られた三船敏郎主演映画「無法松の一生」がヒットし、ヴェネツィア国際映画祭でグランプリを受賞したことが契機となる。「無法松」物の映画は、三船敏郎版に続いて、三國連太郎版（1963年）、勝新太郎版（1965年）が作られた。また1960年代には、映画「無法松の一生」のモチーフを取り入れた「馬鹿まるだし」（1964年）、

「でっかいでっかい野郎」（1969年）、「男はつらいよ」（1969年）、「続・男はつらいよ」（1969年）も作られた。「無法松」物のテレビドラマは5作品あるが、1957年から1964年の間に集中している。1960年代は「無法松」物の演劇も盛んで、文学座（1969年12月）、劇団新派（1964年2月・6月）、新国劇（1960年1月、1962年4月・5月・8月）などの舞台があった。

3回目は1980年代で、1981年に村田英雄が「無法松の一生（度胸千両入り）」を発売したことが契機となる。この曲は有名歌手によって相次いでカバーされ、誰もが口ずさむことのできるほど高い人気を得た。1980年代は「無法松」物の座長公演も盛んで、小林旭（1982年7月）、杉良太郎（1983年7月、1984年8月、1987年8月）、北大路欣也（1985年5月）、五木ひろし（1989年1月）、北島三郎（1989年6月）が松五郎を演じた。さらに宝塚歌劇団の「永遠物語」（1982年4月、1983年2月、1988年7月）、沢竜二事務所の「無法松の一生」（1986年1月、1987年4月）も上演されたが、この2作品はともにミュージカルである。原作には、路地で子供たちがわらべ歌「草履かん隠し」を歌う場面、「遠く小倉の在方の横代や蒲生近辺迄も盆踊りの口説に出掛け」、美声が「在方の百姓迄にも良く知られてゐた[32]」松五郎が吉岡家で追分を歌う場面、敏雄が家で唱歌「青葉の笛」を歌う場面、青島陥落祝賀の提灯行列参加者が一高寮歌「アムール河の流血や」、「あゝ玉杯に」を歌う場面、松五郎が小学校の校庭で唱歌「朧月夜」を聞きながら死ぬ場面があり、まるで文字の間から歌声が聞こえてくるような作品となっている。このことが歌手の座長公演やミュージカル作品を生み出す大きな要因となったと思われる。

「無法松」の物語は、戦時中から現在までの長い年月の中で、演劇、映画、テレビドラマ、ラジオドラマ、浪曲、歌謡曲などの作品[33]に姿を変え、日本社会に根付いてきた。以前のようなブームが再来することはないだろうが、「無法松」の物語はこれからもいろいろな人々によって読み換えられ、しぶとく生き残っていくであろう。引き続き「無法松」物の行方を注視していきたい。

注

1　杉野元子「戦時期における岩下俊作「富島松五郎伝」の改編をめぐって」『芸文研究』105－1号、2013年12月、154～172頁。

2　『文学座五十年史』文学座、1987年、189頁、215頁、258頁、259頁。

3　岩下俊作原作、森本薫脚色「富島松五郎伝」『森本薫全集第三巻』世界文学社、1953年、58～59頁。

4　岩下俊作「富島松五郎伝」『第二期九州文学』13号、1939年10月、59頁。

5　劇団新国劇は1955年9月明治座で「無法一代」、1955年11月御園座で「無法一代」、1955年12月大阪歌舞伎座で「無法一代」、1958年3月東横ホールで「無法一代」、1960年1月明治座で「無法一代」、1962年4月大坂新歌舞伎座で「無法松」、1962年5月新宿コマ劇場で「無法松の一生」、1962年8月名鉄ホールで「無法松の一生」、1973年1月南座で「無法一代　富島松五郎伝」、1974年7月大阪毎日ホールで「無法一代」、1974年7月御園座で「無法一代」、1976年4月～5月全国各地で「無法松の一生」、1977年10月博多市民会館で「無法一代」を上演した。脚色・演出は中江良夫、主演は辰巳柳太郎である。新国劇は1987年に解散したが、同年、中堅メンバー18人が劇団若獅子を結成、2012年には「無法松の一生」（脚本：中江良夫、演出：田中林輔、主演：笠原章）を上演した。

6　岩下俊作原作、中江良夫脚本・演出『富島松五郎伝より　無法一代』（上演台本）、1955年7月、4－1－29～4－1－42頁。なお、松竹大谷図書館所蔵の上演台本は、松五郎の台詞「奥さん、俺淋しんぢや。」の箇所に、鉛筆による二重取り消し線が引かれている。

7　大月隆寛は『無法松の影』（毎日新聞社、1995年、247～249頁）の中で、1953年文学座公演のときに杉村春子が演じた吉岡良子が、「わたしは松さんが好きです、人間として」と言ったことに注目して、この「人間として」という一言は、「いかに崇高なもの言いであれ、いかに誠実な動機によって吐かれたものであれ、無法松の疎外感を増幅する方向にしか働かない」、そして「この「人間として」を言った瞬間から、言った当人の吉岡良子もまた「人間」という、何ら具体的な性を背負わない得体の知れない存在に抽象化される」と指摘している。しかし筆者は1953年文学座の森本薫脚色上演台本は未見であるが、同時期に出版された森本薫脚色台本「富島松五郎伝」（『森本薫全集第三巻』世界文学社、1953年）では、「わたしは松さんが好きです、人間として」に類する台詞を見つけることができなかった。また1964年劇団新派と1969年文学座の森本薫脚色上演台本にも、このような台詞はない。

8　岩下俊作原作、榎本滋民脚本・演出『梅田コマ劇場二月公演　無法松の

一生』（上演台本）、印刷年記載なし、2－67 ～ 2－69頁。

9　同脚本、2－105頁。

10　五十周年史編集委員会編『劇団青年座五十周年史』劇団青年座、2004年、83頁。

11　岩下俊作原作、西島大脚本「無法松の一生」『悲劇喜劇』51巻2号、1998年2月、158頁。

12　同脚本、146頁。

13　青春座は1945年10月、北九州で結成されたアマチュア劇団である。1947年6月に「富島松五郎伝」（脚色：森本薫）を初演、現在に至るまで、劇団の代表的演目として上演を重ねている。

14　劇団新派は、1964年2月新橋演舞場、同年6月御園座で「富島松五郎伝――無法松の一生――」（脚色：森本薫、演出：戌井市郎、主演：大矢市次郎）、1972年10月新橋演舞場で「無法一代」（脚色・演出：中江良夫、主演：辰巳柳太郎）を上演した。良子は劇団新派の看板女優・水谷八重子が演じた。

15　宝塚歌劇団は、1982年に宝塚バウホールで「永遠物語」（脚色・演出：草野旦、主演：榛名由梨）を初演、松五郎は榛名由梨の当たり役となった。1983年、1988年、1998年、2013年にも再演された。

16　沢竜二事務所は東京・本田劇場で1986年と1987年に「無法松の一生」（脚色：磯田啓二、補綴：沢竜二、演出：澤井信一郎・沢竜二、主演：沢竜二）、2004年に「沢式みゅーじかる無法松の一生」（脚色・演出：澤井信一郎・沢竜二、主演：沢竜二）を上演した。

17　岩下俊作原作、伊藤大輔脚本『無法松の一生』（映画台本）、東映株式会社、1963年、E－24 ～ E－25頁。

18　藤原審爾原作、加藤泰・山田洋次脚本『馬鹿まるだし』（映画台本）、松竹株式会社映画制作本部、1963年、7－10頁。

19　「喜劇映画・山田洋次（9）館内爆笑「撮れる」自信」『読売新聞』朝刊、2006年12月4日。

20　佐藤忠男『みんなの寅さん――〝男はつらいよ〟の世界』朝日新聞社、1988年、97頁、99頁。

21　山田洋次・朝間義隆脚本『遙かなる山の呼び声』（映画台本）、松竹株式会社映画制作本部、1980年、9－1頁。

22　「シネマの週末・トピックス：オリヲン座からの招待状」『毎日新聞』夕刊、2007年11月2日。

23　「テレビドラマデータベース」〈http://www.tvdrama-db.com/〉（最終アクセス2014年3月8日）。

24　戦中・戦後の浪曲史については、唯二郎『実録浪曲史』（東峰書房、1999

年）を参照した。

25　同書、139頁。

26　同書、126頁、128頁。

27　内山惣十郎『浪曲家の生活』（雄山閣、1974年、42頁）によると、「米軍が日本々土に進駐するや、戦意昂揚に一役買った浪曲は、進駐軍に白眼視されて、一々口演台本は検閲を受け」、「武芸物や忠孝美談は民主々義に違反するというので一切禁止の憂目を見」た。

28　村田英雄の経歴については、村田英雄・加藤恵美子『村田英雄の人生峠　母の愛は虹の色』（サンケイ出版、1985年）、村田英雄『俺は村田だ!!』（双葉社、1993年）、安武秀明『男の応援歌　村田英雄聞書』（西日本新聞社、2000年）を参照した。

29　坂本冬美の経歴については、大下英治『坂本冬美　火ざくら伝説』（双葉社、1996年）を参照した。

30　同書、25頁。

31　「歌手・坂本冬美さん：17」『朝日新聞』朝刊、2012年6月25日。

32　岩下俊作「富島松五郎伝」『第二期九州文学』13号、1939年10月、8頁。

33　紙幅の関係で詳述できないが、「無法松」物の漫画として、あすなひろし脚色・構成・作画「無法松の一生」（『週刊少年ジャンプ』集英社、1969年17～19号）、「無法松」物の講談として、川島みちこ脚色、上岡龍太郎口演「無法松の一生」（1992年9月12日、大阪・サンケイホール）などがある。